昭和 42年 12月 25日第三種郵便物認可　平成 25年 2月 25日発行（偶数月 25日発行）　通巻 453号　ISSN1882-9643

JSAF

J-SAILING
JAPAN SAILING FEDERATION

NO.99

www.jsaf.or.jp

NABISCO
ナビスコ リッツで
カンタン・スイーツ。
RITZ
CRACKERS
RITZ
CRACKERS
ヤマザキナビスコ

JSAFからのメッセージ

一人でも多くがメンバー登録を

メンバー登録の時期が来ました。メンバーに登録すると、レース参加資格を得られ、レースでの事故に対する保険に加入でき、レースや講習会などの行事の案内が提供され、機関誌J-Sailingが送付されます（ジュニア、ユースは除く）。セーリングスポーツを楽しむ仲間として、メンバー登録を基本に、何ができるかをともに考えたいと思います。

ＪＳＡＦの活動の三本柱は普及・勝利・文化です。セーリングの底辺を支える普及、オリンピックを頂点とするレースでの勝利、そして80年の伝統に基く文化です。

文化とは、セーリングスポーツの根底にある基本姿勢、友情・尊敬・品格そしてフェアプレーの精神です。互いに尊敬し、同じ規則の下で技を競い、競技が終われば讃えあって友情をはぐくむ、この姿勢が大切です。

競技規則は、「危険な状態にあるものを助けること」から始まります。競技中に規則違反があれば抗議を提出する、あるいは自らペナルティを履行する。自律と自主性を基本とする品格とフェアプレーの精神が息づいています。体罰問題に揺れるスポーツ界にあって、セーリングスポーツの理念、基本姿勢について今一度振り返ってみてはいかがでしょうか。

ＪＳＡＦは全国各地のジュニアクラブ、高校ヨット部などでセーリングを教える指導者たちの活動を支えます。最近、キールボート強化委員会や日本ヨットマッチレース協会が協力しマッチレースも人気が出てきています。ジュニアからシニアまで、ディンギーやウィンドサーフィンから大型艇まで、シームレスなスポーツとなるよう取り組んでいます。

メンバーのみなさま方には、次世代を担う若者たち、一緒にセーリングを楽しむ仲間たちに、ぜひ海のスポーツの素晴らしさを伝えるとともに、メンバー登録をお誘いいただけるようお願いしたいと思います。

JSAFのメンバーになれば

- メンバーズカードが発行され、公式競技参加の資格が与えられます。
- 会費の一部が傷害保険の保険料に充当され、セーリングの事故による死亡、後遺障害に適用されます。
- JSAF の会報誌「J－SAILING」が送付されます。（高校・ジュニアを除く）
- 各種講習会などに参加でき、資格を取得する際の条件に適用されます。
- 「J－SAILING」をはじめ、所属する加盟団体からもセーリングに関する各種行事やレース日程などの情報が提供されます。

加入、更新手続きの詳細は各加盟団体にお問い合せください。

http://www.jsaf.or.jp/dantai/

提言

420級とレーザーラジアル級の普及について

ユース制式艇種実行委員会の西岡一正委員長（ＪＳＡＦ副会長）

ＪＳＡＦユース制式艇種実行委員会は、日本の若い世代のセーラーにどんな艇種が適切かの検討を重ねてきた。その結果、ダブルハンドでは４２０級、シングルハンドではレーザーラジアル級との結論に至った。この結論をＪＳＡＦ理事会の議題として上げ、何度かの協議の結果２０１２年１月の理事会で４２０級とレーザーラジアル級をユース世代の制式艇種として採用するとの機関決定がなされた。この議論を推進した同委員会の西岡一正委員長（ＪＳＡＦ副会長）にその経過を伺った。

制式艇種の決定について

まず、「制式」とは、制度として採用したものとご理解ください。つまり、ユース世代に１つの艇種を集中的に使ってもらおうとＪＳＡＦとして機関決定、あるいは意思決定したものです。決定に至った経緯を説明します。

国体の少年少女クラスではセーリングスピリッツ級が採用されています。一方、同世代が参加するインターハイではＦＪ級が採用されています。高校生世代では国体とインターハイで別の船が使われており、２つの流れができてしまっていることが問題で、この状態が７年ほど続いているのです。

一方、高校ヨット部は、昨今の経済的な状況から、存続することさえ難しくなっています。そこで、高校生世代の制式艇種を統一することで経済的な負担を軽くし、この世代のヨットの活動を活性化し、普及に役立てたいとＪＳＡＦは考えたわけです。

さらに問題なのは、高校生セーラーを指導するコーチたちのネットワークが構築できていないという状況があります。とくに高校ヨット部では、顧問の先生方が必ずしもヨット経験者ではないという側面があり、それが原因でヨット部の運営が難しくなっているという学校も存在するのが現状です。

そこで、これらの状況を打開し、高校ヨット部、各水域の高校世代のセーラーたちがいっしょになって活動できる環境を作ろうと考えました。

ここで大切なことはＯＰ級を卒業するジュニア世代のことです。体格も大きくなり始める彼らの活動を支えるシステムが日本には欠けているのです。現状では、地域のジュニアで育ったセーラーがＯＰ級を卒業した後は高校のヨット部、あるいは限られた地域のヨットクラブに入るしか活動を続けられません。しかし、前述のようにヨット部を持つ高校の数はそれほど多くはないし、存続さえも危ぶまれ、そして地域のヨットクラブ自体もその数は多くはありません。

さらに、高校のヨット部に入ったとしても、身体のまだまだ小さいセーラーがいきなりＦＪ級に乗るしか選択肢がないという状況があります。

他方、ユース世代の国際レースには４２０級とレーザーラジアル級が採用されているという現実があります。ところが、日本のユース世代が世界に目を向け４２０級に乗りたいと思っても、高校のヨット部、あるいは国体につながる練習の中で４２０級に乗る機会は限られてしまっているのです。

こういった状況を何とか解決しようと、ＪＳＡＦは２年ほど前から何回かアンケートを取り、水域に出かけて現場の方々の意見を聞き、高体連ヨット部の方々と議論しました。このような議論や意見交換を重ねて、２０１２年１月にＪＳＡＦ理事会でユース世代の制式艇種として４２０級とレーザーラジアル級を採用しようと意思決定をしたというわけです。

この決定に基き２０１２年９月に高体連ヨット専門部では、２０１５年のインターハイから４２０級を採用するという決定がなされました。これは高体連にとっては大きな変革で、その結果、しばらくの間はＦＪ級と４２０級が並行してインターハイに採用される期間が続くことになります。

また、国体も２０１５年和歌山大会から少年少女のクラスでレーザーラジアル級と４２０級が採用されるように、ＪＳＡＦ国体委員会が日本体育協会と折衝を始めているところです。

４２０級とレーザーラジアル級である理由

４２０級を採択するに至った理由について、まずは４２０級とＦＪ級のコンセプトについてご紹介します。

ＦＪ級はＦＤ（フライングダッチマン）級のジュニア版として開発された艇です。ＦＤ級に見られる技術革新を導入し、若いセーラーたちにマストレーキやマストベンドなどの複雑なチューニングを学ばせることが設計思想のひとつでした。

かたや４２０級はワンデザイン艇に徹底しようというコンセプトで開発されました。基礎的なチューニングはもちろん必要ですが、複雑なチューニングは省き、船の操船を覚えるために開発されたと聞きます。これが現在のＩＳＡＦワールド

強風下でも安定して走れるのが420級の特徴の一つと言われている（写真左、右／平井淳一）

昨年、葉山で開催された420級全日本選手権の1シーン。学生、社会人が混在する興味あるレースとなった

で420級が採用され続けている大きな理由であろうと考えます。与えられた船で操船の基本を学ばせることを目的に開発されたユースセーラー用の艇種なのです。

また、FJ級は古い世代の艇と新しい世代の艇では性能差がハッキリと異なると言われています。チューニングを正しく教えられる指導者がいればFJ級の性能を適切に引き出せるのでしょうが、今の日本ではそれが難しい状況です。たとえて言うならFJ級はオートマチック車で、420級はマニュアル車と言ってもいいかもしれません。チューニングは限定的にして操船技術で船を走らせることに専念させようという思想からきているようです。

だからこそ、こういったFJ級のオートマチックな要素を取り除き、ユースセーラーが純粋に操船技術を競えることが420級では可能だと考え、ユース世代には420級の方がより適切であるとJSAFは考えるのです。

また、420級の乗員2人の合計体重は125kgから130kgが適正であり、かたやFJ級は115kgくらいが適正体重とされています。こういったことからも、身体が大きくなり始めたユース世代には420級が向いていると言えるでしょう。

また、420級はプレーニングがしやすい船であり、セーリングそのものが楽しめる艇種でもあると聞いています。さらに、420級はFJ級に比して安価であり、安全性も高い。つまり、安い、安全、楽しい、国際レースにつながるといったことから420級が日本のユース世代に向いていると考えるわけです。

また、レーザーラジアル級については、国際的に普及している点、国内でも普及し始めている、操船がしやすいという点が採択に至った理由です。

しかし一方で、オリンピックから470級が外れる可能性が皆無というわけではなく、仮にそうなった場合、国際レースにつながる420級という位置づけがなくなり、JSAFが採択した意味がなくなるのではという指摘もあります。

そこで改めて考えたいのは高校生世代にヨットを普及させる時に何が重要なのかということです。安くて、安全で、セーリングを楽しめること、これが大きな要素です。

たとえばISAFワールドでハイパフォーマンス・スキフのような艇種が採用されたとしても、高校生世代が安全にセーリングの基本を覚えるには420級が適切だと考えています。スキフに乗る前のセーリングの基本を420級でトレーニングしてくださいということなのです。

セーリングの普及、促進のために

そうはいっても、そんなに目論見どおりには普及しないだろう、また高校ヨット部活動にとって経済的負担が大きすぎるという指摘があります。

そこで、現在123校ある全国の高校ヨット部に少なくとも1隻は420級が行き渡るようにしようとJSAFは考えました。

その方法論を様々に議論したのですが、高校ヨット部に420級を購入してもらうことは財政的な問題で不可能です。高校に経済的な負担はかけられないのです。

同時に、高校ヨット部に属していなくてもヨットに乗れる機会を創出するために、県連を中心にした各水域のシステムを作ろうとの議論も起こりました。

そこで、420級を普及させるには、JSAFと県連が420級を購入し、それを県連傘下の高校ヨット部に無償で貸与する仕組みを作ろうと考えました。

そのために、420級についてはISAFワールドで使用されたいわゆる新古艇を比較的安く購入することとしました。一艇がおよそ70万円かかります。しかも、これを実現するためには新たな資金が必要になります。JSAFはこのために予算を割くことにしましたが、県連の予算も充当していただきます。

しかし、それでも間に合わないので、この考え方に賛同していただける方々から寄付を募ろうと考えています。J-SAILING97号11ページでも紹介したように、そしてJSAFホームページにも掲載しているように、その方法は簡単なので、JSAFメンバーの方々には是非とも協力をお願いしたいと思います。昨年の12月31日現在で、2千4百万円の寄付が集まっていますが、まだまだ2千万円ほど足りない。みなさまのご協力をよろしくお願いいたします。なお、この募金は免税処理が受けられますので、それを大いに活用していただきたいと思います。

このように420級を揃える準備は着々と進んでいるのですが、さらに大切なことは指導者を育てなければいけないということです。420級に限らず、これがセーリングの普及の大きなテーマになってきます。JSAFとして指導者の育成がこれからの大きなテーマなのです。

今後、420級が普及してセーラーが育てば、ワールドをはじめ国際レースを目指す選手が出てくると思いますが、そういったことを想定して新しいシステムを考えています。

その一つが、JSAFジュニア・アカデミー委員会、普及委員会、オリンピック特別委員会とジュニア・ユース強化育成委員会が協力してコーチを水域に派遣し、コーチを指導するプログラムを確立することです。2013年度からスタートするように準備しています。

また、この活動はオリンピック選手の育成強化とも連動させようと考えています。オリンピックを目指すセーラーに対しては強化合宿を行うのですが、ここにジュニア・ユースやコーチを招聘し、若いセーラーやそのコーチたちに、オリンピックを目指す選手たちといっしょに走ってもらおうという試みです（編集部注：2012年12月に和歌山トレセンで既に実施）。

さらに、こういったことは高体連の方々にもご理解いただき、高校ヨット部セーラーにインターハイで頑張るだけではなく、その次の段階の目標を持ってもらおうと考えています。たとえば、インターハイの成績優秀者が何らかの国際レースに参加できるシステムが作れれば、高校ヨット部セーラーのモチベーションが高まるのではないでしょうか。その際、成績優勝校の顧問やコーチも帯同してもらえればということも考えています。

くどいようですが420級を配るハード面の整備だけではなく、選手の育成、指導者の育成をともに行わねばならないとJSAFは肝に銘じています。

その他、高校ヨット部の部員数の減少、教育の場としてのヨット部のあり方、高校ヨット部におけるシングルハンダーの導入、国体のレースのコースを国際標準にして世界に通じる国体レースにしようとする考え、国体のコストの削減などなど様々な課題はありますが、JSAF全体、日本ヨット界全体として世界に通ずるセーリング環境を作り上げたいと考えています。JSAFメンバーの方々のご理解とご協力をお願いする次第です。

JSAF 海の絵画コンテスト2012

JSAF 環境委員会が主催する「海の絵画コンテスト 2012」に、全国の小中学生から 560 点以上の応募がありました。3 人の審査委員がじっくりと鑑賞し、受賞作品を選出しました。

残したいのはきれいな海

絵画コンテストのテーマは「海、浜辺や港と燈台、ヨット（舟）のある風景等」です。

海の絵を数多く描いておられ、自身もセーラーであり、ヨットで世界を旅された柏村勲さん、マリンイラストレーターとして活躍される高橋タダミさん、画家の家泉早苗さんにJSAF事務局のある岸記念体育館に集まっていただき、昨年末、全作品の鑑賞会兼審査会を開催しました。小学校低学年、同高学年、中学校に分かれた作品群を入念に鑑賞した3人の方は、印象に残った作品をそれぞれ選出しました。

また、永井真美JSAF環境委員会委員長は、「今回初めて海の絵画コンテスト審査に立ち会い、小中学生の多彩な色使いでイキイキと描かれた力作の数々に感動しました。住んでいる地域ごとに描く船にも特色があり、おそらく同じ船を描いたであろう絵も個性、角度でまた違った雰囲気になっており、皆の絵を描く背景を想像しながら拝見させていただくのも楽しいひと時でした。日本は海に囲まれた国、子どもの頃から環境の大切さを育む啓蒙活動は重要と考えます。残したいのはきれいな海です。いつまでもきれいな海が保てるよう意識向上の一助となれたのであれば嬉しいことですね」と鑑賞会兼審査会を終えての感想を語りました。

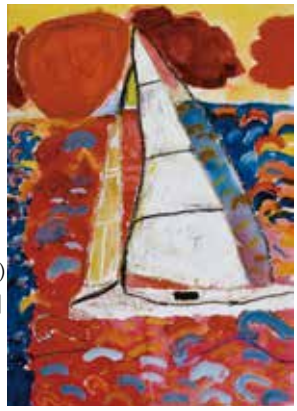
グランプリ JSAF 会長賞　高野 空（足立区立古千谷小学校２年）「大きな船にのって釣りをする私」

〈小学生低学年の部〉

金賞　安倍川きらら（横須賀市立豊島小学校２年）「白い客船」

銀賞　磯貝英里（東郷町立兵庫小学校３年）「夕日の中のヨット」

銅賞　古谷瑞樹（名古屋市立桶狭間小学校2年）「夕日の中を走る」



〈小学生高学年の部〉

金賞　渡辺遼介（佐野市立界小学校５年）「夏の灯台と海」

銀賞　安藤悠仁（気仙沼市立気仙沼小学校６年）「夕日に進むヨット」

銅賞　小林優生（草加市立谷塚小学校４年）「大海原へ」

〈中学生の部〉

金賞　湯浅和奏（石井町立石井中学校２年）「ヨットのりば」

銀賞　阿久田潮斗（草加市立両新田中学校１年）「海の仕事場」

銅賞　梶原伸郎（日田市立三隈中学校２年）「深海帆船」

左から高橋タダミさん、柏村勲さん、家泉早苗さんの審査員各氏。一番奥は永井真美 JSAF 環境委員長（写真／濱谷幸江）

海の絵画コンテスト 2012　応募全作品